

討論メモ

「ウクライナ戦争の歴史的背景」

令和 4年12月20日

1. 12月には、表題について児玉寛嗣さんにプレゼンテーションをしていただきました。5世紀ごろまで遡って、ウクライナの地で繰り返されてきた、ウクライナ、ロシア、ポーランド、蒙古などの民族が入り乱れての抗争の歴史を振り返っていただきました。

人種、宗教、文化、言語などの相違を抱えながら繰り返されてきた複雑な愛憎の歴史を各時代の地図と共にご説明頂き、それが現代の争いの伏線になっているとご指摘いただきました。

詳細な地図と解説はHPに掲載されていますので、ご参照下さい。

2. 引き続き出席の8名による意見交換に移り、下記の如き意見が出された。

- ・ウクライナは屈服せずよく頑張っている。

- ・ウクライナはNATO,特に米国の代理戦争ともいえる。屈服しないのではなく

て、米国からの圧力で、停戦させてもらえないのではないか。

- ・ロシアから見れば、NATOの東方進出は脅威だ。ウクライナはどうしても中

立なバッファー地域にしておきたいのではないか。

・19世紀には、日本もロシアの南下政策に悩まされ、朝鮮半島をバッファー地域としておきたくて、戦うことになった歴史がある。

・絶対中立なバッファー地域を設けることが、欧州各国の安全保障政策の基本になってきた。

・プーチンはウクライナはすぐに屈服すると思っていたのではないか。ゼレンスキー政権の覚悟を見誤ったのではないか。

・ゼレンスキーは英雄視されているが、パナマ文書で巨額な海外資産を有していることが判明しているし、FTX 関連のマネーロンダリングも疑われている。救国の英雄ではなくて、実態はウクライナ人民を犠牲にしつつ私腹を肥やしているとの評もある。

・プーチンは8割のロシア国民が支持しているそうだが、ロシアの世論は信用できるのだろうか。

・プーチンはユダヤ資本に奪われていたロシアの資源を国民の手に取り戻した実績があるし、強いリーダーを求めるロシア国民に支持されているのではないか。

・欧米の、ロシア、特にプーチン評価は著しく偏っているので、注意してみる必要がある。

- ・停戦の見込みが立たないようだ。

- ・歴史的背景を踏まえて、両国に言い分があるようだ。

- ・早い段階なら“ミンスク合意”の戻れたと思うが、ロシアが東部4州の併合を発表しているので、“ミンスク合意”にはもはや戻れないのではないか。

- ・戦争が長引き、両国の被害が大きくなってしまったので、互いに引くに引けない。

- ・プーチンは最悪の場合には核の使用も辞さない筈だ。

- ・文豪ソルジェニーツィンはもともとロシアとウクライナは一つと云っている。

両国の線引きは難しい。

- ・停戦の条件としては、ウクライナを中立国家にするしかないが、ロシアが併合を宣言した東部4州の扱いが問題になるのではないか。

- ・米国は600億ドルもの巨額の援助をし、なお積み増すと云っているが、共和党には巨額援助に反対している議員が多数いるそうだ。共和党が下院の多数となる来年の議会から停戦の動きが出てくることに期待したい。

- ・巨大資本グループが金もうけのための戦争を起こしている感があるが、米国に

はかつてのように、“世界を守る”という気概はないのか。

- ・もはや米国には、その力も、気概もないのではないか。

- ・ウクライナは戦闘能力を失っているという情報もあるが、ロシアも半導体不足で、兵器生産が滞っているとの情報もある。

- ・ベラルーシはロシアと強固な連帯を誇っているが、政権が変わればウクライナ同様の混乱に陥る危険もある。

- ・スラブ民族は誇りは高いが、歴史的には英仏独米など強国に虐げられてきた被害者意識、あるいは警戒感も強いようだ。

- ・ロシアは優れた文豪を多く輩出している。

- ・プーチンも度々、この戦いは、ロシア民族、文化、言語を守る戦いだとロシア国民に語り掛けてきている。

- ・日本にあるロシア料理屋が苦戦しているようだ。

以上

